様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０２３７５

研究課題名（和文）陶磁器流通からみるグローバル化の世界史-日本・アジア・中南米をフィールドに-

研究課題名（英文）The World History View from Distribution of Porcelain

研究代表者
野上　建紀（NOGAMI, Takenori）

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：６０７２２０３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、大きく二つのテーマがあり、テーマI「1571年に始まるグローバル化と磁器の商品化（16世紀から17世紀）」については、ガレオン貿易やインド洋貿易による陶磁器流通の実態を考古資料によって検討し、アジアの特産品であった磁器が世界商品となる過程を明らかにした。そして、テーマII「グローバルな磁器の浸透と大衆化（18世紀から19世紀）」については、五島列島など島嶼部の磁器生産窯の発掘調査を行い、その成立過程と磁器使用の普及の様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　磁器は東アジアの特産であった。特産であるがゆえに古くから国境を越えて運ばれる商品となっていた。中国の磁器が海を越えてアジアやアフリカに運ばれた。そして、大航海時代を迎えると世界商品となり、その市場は地球規模となり、中国磁器に続いて肥前磁器も世界に渡った。磁器が世界に広まると、続いて地域を超えて磁器が生活の中に普及していき、現在のように日用品化した。
　本研究では大航海時代以降の磁器市場の空間的な広がりと日用品化していく過程を生産地と消費地の考古資料によって明らかにしたものである。モノからみた近世のグローバル化を描き出したものである。

研究成果の概要（英文）：This research has two themes. Regarding theme I “Globalization and commercialization of porcelain since 1571 (16-17th century)", I consider the actual situation of porcelain distribution by galleon trade and Indian Ocean trade. After examining the archaeological materials, I clarified the process that porcelain became global products from specialty goods of Asia. Regarding Theme II “Global Penetration and Popularization of Porcelain (18-19th Century)", I excavated some kilns in islands such as the Goto Islands, and clarified the process of their formation and the spread of porcelain.

研究分野：考古学

キーワード：グローバル化　磁器　ガレオン貿易　島嶼部　五島列島　世界商品　日用食器

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1571 年に始まる近世のグローバル化によって、アジアの産物である磁器は、絹とともに世界商品化していった。ガレオン貿易によって中南米の銀がアジアに流れ込み、アジアの磁器や絹が太平洋を渡っていった。当初、世界に出回った磁器は中国磁器であったが、中国の明清の王朝交代に伴う混乱やその後の海禁政策によって、中国磁器に代わって日本の磁器、すなわち有田焼などの肥前磁器が海外市場に出回るようになった。その結果、肥前磁器は世界市場に輸出された日本の工業製品としての先駆的な役割を果たすことになる。

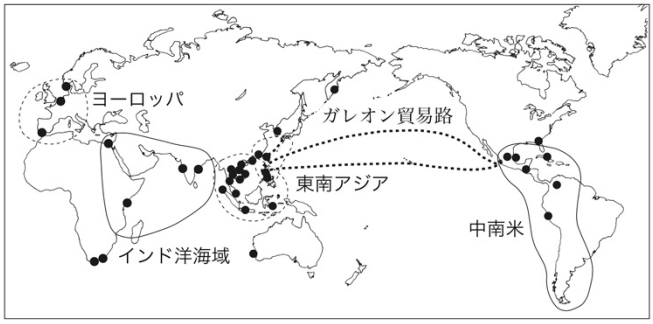

図１　17～18世紀の有田焼の流通圏（出土分布）とガレオン貿易路

そして、18 世紀になると、磁器の流通と普及は次の段階を迎える。肥前磁器の大量輸出時代は、17 世紀末に公布された中国の展海令による中国磁器の再輸出の本格化によって終焉を迎えるが、その終焉とともに急速に国内で磁器が一般化、大衆化していった。日本国内では「くらわんか碗・皿」という粗製の器が全国津々浦々に運ばれて、庶民の食生活に磁器をもたらした。同時にアジア大陸でも中国の福建・広東地方で生産された磁器が大量に出回るようになる。17 世紀後半の中国の海禁政策は、日本を含めた世界各地の窯業地を刺激したが、中国国内の窯業地の国内需要の拡大をも引き起こし、結果的に低廉化した磁器が世界に出回ることとなった。さらに続いて産業革命によって工業製品化されたヨーロッパ磁器が世界各地で出回るようになる。

こうしたグローバルな磁器の同時代的な浸透がどのような関連を持ちながら進んでいったか、明らかにするとともに、中国の海禁政策やそれに伴う肥前磁器の大量輸出がどのような役割を果たしたのか明らかにすることが課題として残されている。

２．研究の目的

1571 年のマニラ建設後、マニラ・ガレオン貿易が開始され、「旧世界」と「新世界」が政治・経済・文化的に結びつき、近世のグローバル化が始まった。その結果、絹や香料と並ぶアジアの特産であった磁器も新世界を含めた世界的な商品となっていった。

本研究は、まず磁器（中国磁器や肥前磁器）の流通網が短期間のうちに世界を覆うように広がっていった要因と様態を明らかにすること、そして、その後のグローバルな磁器の使用普及の過程について、生産地と消費地、異なる消費地間を比較しながら、共通背景を明らかにすることを目的としたものである。また、鎖国政策下の日本の肥前磁器が世界商品化していった過程の具体的な復元もまだ課題として残されており、その解明も目的の一つとしている。

さらに「磁器の道」について、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、そして、アフリカの四つの大陸にまたがる物質流通の中での陶磁器貿易を相対化し、物質資料からみたグローバル化の世界史を考える。

３．研究の方法

本研究を開始するにあたって、二つのテーマを設定した。一つはテーマⅠ「1571 年に始まるグローバル化と磁器の世界商品化」、もう一つはテーマⅡ「グローバルな磁器の普及と大衆化」である。

テーマⅠについては、アジア、中南米やアフリカなど海外の消費地から出土したアジアの磁器（中国磁器・肥前磁器）の調査を行い、資料化する。特に中南米の中でも未調査のアルゼンチンやチリなど南米大陸南部の国々、そして、東アフリカの国々の調査を行い、中国磁器と肥前磁器の時期別の分布状況を把握する。続いて器種や細かな生産地の分析を行い、おおまかな地域間（大陸間）について巨視的に比較研究する。そして、肥前磁器の主要産地である有田・波佐見の出土資料と海外の消費地遺跡を比較し、海外需要が生産地に与えた影響を考える。

テーマⅡについては、江戸後期の島嶼部の磁器生産窯の発掘調査を行い、その成立と技術導入の過程を明らかにし、国内における磁器の大衆化の過程を明らかにする。さらに日本、アジア、アフリカ、中南米の遺跡を比較しながら、地球規模の磁器の普及過程を考える。

４．研究成果

（１）生産地研究

肥前地域の五島列島では、江戸時代後期に他産地の技術を導入して、磁器生産が行われた。現在、福江島では５ヶ所の古窯跡（小田、戸岐ノ首、山内、八本木、田ノ江）が確認されている。その中で窯壁などの遺存状態が良好な田ノ江窯跡の発掘調査を行った。窯尻（窯の最上部）、焼成室（製品を焼く空間）、胴木間（窯の焚き起こし）の確認を行い、窯の規模や焼成室の構造を把握した（野上編著 2022b）。

田ノ江窯に技術的な影響を与えた他産地の窯跡から出土した製品や窯道具と比較し、それらの影響関係を考察した。そして、陶工の移動、磁器原料の流通について整理することができた（野上編著 2022b）。

図２　田ノ江窯跡の窯壁（長崎県五島市）

さらに地方窯の成立について、波佐見焼の技術伝播をまとめるとともに（中野 2022）、薩摩焼の事例をもとにモデル化を図った（渡辺 2022）。

（２）消費地研究

①アジア（ベトナム・ラオス・フィリピン）

ベトナムやラオスで出土している中国磁器・肥前磁器の調査を行い、資料化を図った。フィリピンについて、ガレオン船の資料をもとに中南米からアジアにもたらされた土器、陶磁器に関する問題を整理した（田中 2022）

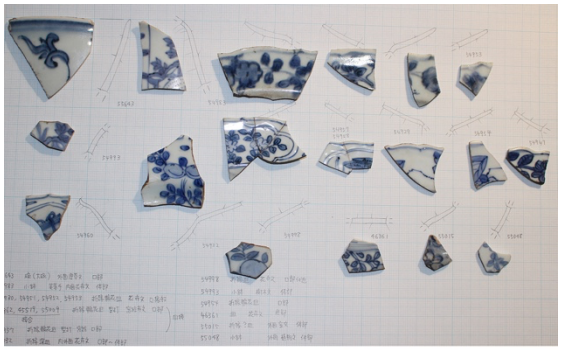
図３　サンタ・フェ・ラ・ビエハ出土中国磁器

②中南米（アルゼンチン・チリ）

アジアの磁器生産地から最も地理的に遠い南アメリカ大陸南部のアルゼンチン、チリから出土している中国磁器について調査を行い、資料化した。17 世紀中頃の洪水水害によって放棄されたサンタフェ・ラ・ビエハの発掘調査では中国の景徳鎮の染付製品が数多く発見されている。特にチョコレートカップの破片が多く見られ、17 世紀前半にはすでに地球規模に磁器が流通していることと、チョコレートなど飲用の嗜好品の普及が磁器市場の拡大に一役買っていることが想定された。またブエノスアイレスでは東洋磁器を模したヨーロッパ産の陶器を数多く確認できた（野上編著 2022a）。

③東アフリカ（ザンジバル・タンガニーカ・ケニア）

インド洋に浮かぶザンジバル島では海岸に漂着する陶磁器の破片を採集して、器種、産地、年代毎に分類し、18～19 世紀における東アフリカの磁器需要の特質を考えた（野上編著 2022a）。

図４　キルワ・キシワニ遺跡（タンザニア）

タンガニーカやケニアでは主としてスワヒリ都市遺跡から出土した陶磁器の分析を行い、インド洋交易の実態（佐々木 2022）とそれが果たした磁器の普及と大衆化について考えた。スワヒリ都市では 18 世紀以降、多くの福建・広東地方の磁器が流入していることがわかったとともに、やがて主体がヨーロッパ産陶磁器に変化することが明らかになった（野上編著 2022a）。

引用・参考文献

佐々木達夫 2022「インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁」『大洋を渡った陶磁器–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（I）』長崎大学多文化社会学部

田中和彦 2022「ガレオン貿易の一側面–ガレオン船により新大陸からマニラに運ばれた土器、陶磁器類：サン・ディエゴ沈船遺跡出土資料の検討を中心に–」『大洋を渡った陶磁器–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（I）』長崎大学多文化社会学部

中野雄二 2022「18 世紀以降における近世波佐見焼の技術と陶工の移動」『五島焼・田ノ江窯跡発掘調査報告書–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（II）』長崎大学多文化社会学部

野上建紀（編著）2022a『大洋を渡った陶磁器–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（I）』長崎大学多文化社会学部

野上建紀（編著）2022b『五島焼・田ノ江窯跡発掘調査報告書–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（II）』長崎大学多文化社会学部

渡辺芳郎 2022「近世後期地方窯における磁器技術伝播：そのパターン化の試み」『五島焼・田ノ江窯跡発掘調査報告書–陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（II）』長崎大学多文化社会学部

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　6件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 野上　建紀	４．巻 754
２．論文標題 陶磁器流通からみるグローバル化の世界史ー日本・アジア・中南米をフィールドにー」プロジェクト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野上　建紀	４．巻 911
２．論文標題 もう一つの東西文化交流路ーマニラ・ガレオン貿易	５．発行年 2020年
３．雑誌名 歴史地理教育	６．最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nogami Takenori, Eladio Terreros	４．巻 28
２．論文標題 Imari Porcelain Crossing the Pacific Ocean	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Newsletter	６．最初と最後の頁 50-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野上　建紀	４．巻 40
２．論文標題 東アフリカ・ザンジバルにおける海岸採集の東洋磁器	５．発行年 2020年
３．雑誌名 貿易陶磁研究	６．最初と最後の頁 94-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上　建紀	4．巻 79
2．論文標題 長崎輸出の金襴手今萬里の生産と流通について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上　建紀	4．巻 1
2．論文標題 長崎から輸出された肥前陶磁	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究	6．最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上　建紀	4．巻 1
2．論文標題 「海揚がり」の陶磁器の性格と年代	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大手前大学史学研究所研究報告（室津・大浦海岸海揚がり調査報告書）	6．最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 49
2．論文標題 近世五島焼の基礎的研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋陶磁	6．最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀 ， 渡辺芳郎 ， 中野雄二 ， 溝上隼弘 ， グェン ティ ラン アィン	4．巻 41
2．論文標題 福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2019）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 金沢大学考古学紀要	6．最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 6
2．論文標題 東アフリカの遺跡と陶磁器（II）ー2019年の調査からー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 71-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野上建紀 ， エラディオ テレロス エスピノサ	4．巻 6
2．論文標題 グアダラハラの陶磁器	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 141-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 グェン ティ ラン アィン ， 野上建紀	4．巻 6
2．論文標題 バッチャン焼の過去と現在	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 175-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 佐々木達夫	4．巻 136
2．論文標題 タンザニアでインド洋貿易の歴史を見る―装飾品としての中国や日本の陶磁器―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 土車	6．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上　建紀，エラディオ・テレロス・エスピノサ	4．巻 5
2．論文標題 アルゼンチン・チリに渡った東洋磁器	5．発行年 2019年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 野上　建紀，佐々木　達夫，金城　康哉	4．巻 5
2．論文標題 東アフリカの遺跡と陶磁器	5．発行年 2019年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 189-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐々木　達夫，野上　建紀	4．巻 5
2．論文標題 インド洋海域交易で運ばれたミャンマー青磁	5．発行年 2019年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 205-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 グェン・ティ・ラン・アィン，野上　建紀	4．巻 5
2．論文標題 タンロン城王宮跡出土の陶磁器	5．発行年 2019年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 169-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 野上　建紀,大橋　康二,渡辺　芳郎,中野　雄二,溝上　隼弘,グェン ティ ラン アィン	4．巻 40
2．論文標題 福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2018）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 金沢大学考古学紀要	6．最初と最後の頁 73-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 渡辺　芳郎	4．巻 40
2．論文標題 右か左か？－近世薩摩焼窯における製品の出し入れ口について－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 金沢大学考古学紀要	6．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 4
2．論文標題 陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流－肥前磁器と「唐人」、「唐船」の関わりについて－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 141-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 39
2．論文標題 五島焼の窯跡と製品について－2016・2017年度の調査から－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 金沢大学考古学紀要	6．最初と最後の頁 13-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nishino Noriko, Aoyama Toru, Kimura Jun, Nogami Takenori, Le Thi Lien	4．巻 5
2．論文標題 Nishimura Masanari’s Study of the Earliest Known Shipwreck Found in Vietnam	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Asian Review of World Histories	6．最初と最後の頁 106-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/22879811-12340007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 渡辺芳郎	4．巻 39
2．論文標題 鹿児島市磯地区における陶磁器生産	5．発行年 2018年
3．雑誌名 金沢大学考古学紀要	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中和彦	4．巻 710
2．論文標題 フィリピン、ルソン島北部金属器時代の埋葬遺跡の調査	5．発行年 2018年
3．雑誌名 月刊考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 31-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 野上建紀
2．発表標題 西海の島々で焼かれた磁器
3．学会等名 「四つの口」科研（対馬研究会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 野上建紀
2．発表標題 「出島」から伝わった肥前陶磁
3．学会等名 長崎県考古学会大会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 野上建紀
2．発表標題 陶磁器流通からみるグローバル化ー2016～2019年の調査からー
3．学会等名 「陶磁器流通からみるグローバル化の世界史」研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 野上建紀
2．発表標題 ガレオン船で新大陸に運ばれた陶磁器
3．学会等名 第272回東南アジア考古学会例会
4．発表年 2020年

１．発表者名 田中和彦
２．発表標題 フィリピン、レナ・ショール沈船遺跡出土の胡椒壺と胡椒入り合子
３．学会等名 「陶磁器流通からみるグローバル化の世界史」研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中和彦
２．発表標題 スペイン植民地時代のフィリピンの土器について
３．学会等名 第272回東南アジア考古学会例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 野上　建紀
２．発表標題 東アフリカの遺跡と陶磁器
３．学会等名 「四つの口」科研（長崎研究会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上　建紀
２．発表標題 福江島で焼かれた陶磁器
３．学会等名 とんめ成章館平成塾
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上　建紀
２．発表標題 伊万里の海外輸出とアフリカ
３．学会等名 アフリカに渡った伊万里（サイエンスカフェ）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上　建紀
２．発表標題 アジア・太平洋海域の陶磁器貿易
３．学会等名 東洋史研究会大会（京都大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上　建紀
２．発表標題 西海の島々で焼かれた磁器
３．学会等名 九州の海と島々の歴史（第３回シンポジウム）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上建紀
２．発表標題 モノから見る多文化社会学
３．学会等名 長崎大学・国立歴史民俗博物館連携協定記念シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上建紀
２．発表標題 島で焼かれた陶磁器
３．学会等名 ワークショップ「島嶼世界のポテンシャルー玄界灘地域を事例としてー」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上建紀
２．発表標題 長崎から輸出されたチョコレートカップ
３．学会等名 長崎県考古学会大会「文明のクロスロード長崎」
４．発表年 2018年

１．発表者名 野上建紀
２．発表標題 陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流
３．学会等名 「連綿と続く長崎と中国の絆」記念講演会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計17件

１．著者名 金沢陽、菊池誠一、坂井隆、野上建紀ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 344
３．書名 港市・交流・陶磁器　東南アジア考古学研究	

１．著者名 増﨑 英明、野上建紀ほか、長崎大学地域文化研究会	４．発行年 2021年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 330
３．書名 今と昔の長崎に遊ぶ	

１．著者名 野上建紀、Eladio Terreros、佐々木達夫、田中和彦	４．発行年 2022年
２．出版社 長崎大学多文化社会学部	５．総ページ数 197
３．書名 大洋を渡った陶磁器ー陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（I）ー	

１．著者名 野上建紀、渡辺芳郎、中野雄二	４．発行年 2022年
２．出版社 長崎大学多文化社会学部	５．総ページ数 101
３．書名 五島焼・田ノ江窯跡発掘調査報告書ー陶磁器流通からみるグローバル化の世界史（II）ー	

１．著者名 野上　建紀	４．発行年 2021年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 288
３．書名 陶磁考古学入門	

1．著者名 鈴木英明 ， デレック・ヘン ， 向正樹 ， 山内晋次 ， 中島楽章 ， 伊川健二 ， アンゲラ・ショッテンハマー ， 野上建紀	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 324
3．書名 東アジア海域から眺望する世界史	

1．著者名 佐々木達夫 ， 李喜寛 ， 松井広信 ， 森村健一 ， 畑中英二 ， 森毅 ， 陳殿 ， 鈴木重治 ， 大橋康二 ， 清水菜穂 ， 野上建紀 ， 佐藤雄生 ， 美濃口雅朗 ， 斎藤正憲	4．発行年 2019年
2．出版社 雄山閣	5．総ページ数 320
3．書名 中近世陶磁器の考古学 第11巻	

1．著者名 片峰茂 ， 寺田正剛 ， 近藤英夫 ， 橋口定志 ， 木村直樹 ， 古巣馨 ， 久留島浩 ， 稲富裕和 ， 野上建紀 ， 高見三明	4．発行年 2019年
2．出版社 長崎文献社	5．総ページ数 161
3．書名 長崎の岬ー日本と世界はここで交わった	

1．著者名 片峰茂、木村直樹、デ・ルカ・レンゾ、片岡瑠美子、藤田覚、野上建紀、宮崎貴夫、稲富裕和、増崎英明	4．発行年 2020年
2．出版社 長崎文献社	5．総ページ数 181
3．書名 長崎の岬II	

1．著者名 佐々木達夫,水上和則,陳殿,片山まび,野上建紀,木村淳,伊野近富,尾野善裕ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 雄山閣	5．総ページ数 332
3．書名 中近世陶磁器の考古学	

1．著者名 長崎大学多文化社会学部、木村直樹,王維,葉柳和則,森川裕二,才津祐美子,野上建紀ほか	4．発行年 2018年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 320
3．書名 大学的長崎ガイド	

1．著者名 Maria Cruz Berrocal,Cheng-hwa Tsang,Nogami Takenori and others	4．発行年 2017年
2．出版社 University Press of Florida	5．総ページ数 254
3．書名 Historical Archaeology of Early Modern Colonialism in Asia-Pacific	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡辺　芳郎 (Watanabe Yoshiro) (10210965)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授 (17701)	
研究分担者	田中　和彦 (Tanaka Kazuhiko) (50407384)	鶴見大学・文学部・准教授 (32710)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐々木　達夫 (Sasaki Tatsuo) (60111754)	公益財団法人古代学協会・その他部局等・理事 (74306)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	テレロス　エラディオ (Terreros Eladio)	テンプロマヨール博物館	
研究協力者	中野　雄二 (Nakano Yuji)	波佐見町教育委員会・学芸員	
研究協力者	グエン　ラン　アィン (Nguyen Lan Anh)	ハノイ大学・日本語学部文化文明学科・学科長	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
メキシコ	テンプロ・マヨール博物館			
ベトナム	ハノイ大学			
アルゼンチン	サンタ・フェ民族学博物館	メンドーサ郷土史博物館		
タンザニア	タンザニア国立博物館			
ケニア	フォートジーザス博物館			